

A-4 ウズベク語における命題的モダリティを表す分析的表現の相互承接

—主観性に注目して—

日高 晋介

(日本学術振興会特別研究員 PD/新潟大学)

【要旨】従来の研究では、ウズベク語 (チュルク諸語南東語群) の命題的モダリティを表す分析的表現 (1. *V-(i)sh kerak* 「はずだ、に違いない」、2. *V-sa kerak* 「だろう」、3. *V-(i)sh mumkin* 「かもしれない」、4. (*V-PTCP) ekan* 「ようだ、そうだ」) の承接順について言及がない。ウズベク語では、対事的モダリティは屈折接辞等によって、対人的モダリティは文末接語を用いて表されることから、主観性が高い要素がより文末近くに出現すると想定される。この想定は上記 1.~4. の組み合わせにも当てはまるのだろうか。本発表では、コーパス調査とインフォーマント調査を通して、1.~4. の相互承接を明らかにする。調査の結果、主観性が比較的高い 3. と 4. がより文末近くに位置することを明らかにした。さらに、1. と 2. が互いに組み合わせられないことから「蓋然性」という認識的モダリティの下位範疇を成すことを提案する。

0. はじめに

ウズベク語の命題的モダリティを表す分析的表現 (1. *V-(i)sh kerak* [V-VN necessary] 「~はずだ、~に違いない」(確信; 日高 2013: 480)、2. *V-sa kerak* [V-COND necessary] 「~だろう」(予期された動作; Bodrogligeti 2003: 876、疑い・心配; Abdurahmonov et al. 1976: 110、推定; Kononov 1960: 39)、3. *V-(i)sh mumkin* [V-VN possible] 「~かもしれない」(可能性; Bodrogligeti 2003: 853, Kononov 1960: 401)、4. (*V-PTCP) ekan* 「~ようだ、そうだ」(証拠性; Johanson 2003: 279, 2018: 516)) では 1 つの動詞語幹に複数の表現が後接しうるが、従来の記述では互いの承接順については特に注目していない。ウズベク語では、対事的モダリティを表す要素 (屈折接辞 *-(i)b* [EVID] など) の後に、対人的モダリティを表す要素 (文末接語 *=da* [強調]、*=a/=ya* [確認]、*=mi* [疑問] など) が現れる。この文末に位置して対人的モダリティを表す文末接語は、話し手による聞き手の働きかけを表す、高い主観性を示す要素であり、このことから主観性が高い要素であるほど文末に近い位置に出現すると想定される。この想定は、冒頭に挙げた命題的モダリティを表す分析的表現間でも当てはまるのだろうか。本発表では、コーパス調査と母語話者からの聞き取り調査を通して、命題的モダリティを表す分析的表現の相互承接を主観性に注目して明らかにする。最後に、*V-(i)sh kerak* と *V-(i)sh mumkin* が認識的モダリティの「蓋然性」という下位範疇にまとめられることを提案する。

本発表の構成は次の通りである。1 節で先行研究を概観したのちに問題提起を行い、2 節でコーパス調査、3 節でインフォーマント調査についてまとめる。最後に 4 節で結論と今後の課題を述べる。なお、本発表における例文番号・グロス・日本語訳・文字飾り (太字・下線など) はすべて発表者による。

1. 先行研究と問題提起

本発表では、認識的モダリティと証拠性モダリティから成る命題的モダリティ (Palmar 2001) を表す分析的表現 (屈折接辞以外による表現) として、日高 (2013) で得られたデータから、次の 4 つの表現を取り上げる: 1. *V-(i)sh kerak* [V-VN necessary] 「~はずだ、~に違いない」(日高 2013: 480)、2. *V-sa kerak* [V-COND necessary] 「~だろう」(推量; Kononov 1960: 398)、3. *V-(i)sh mumkin* [V-VN possible] 「~かもしれない」(可能性; Bodrogligeti 2003: 853, Kononov 1960: 401)、4. (*V-PTCP) ekan* 「~ようだ、そうだ」(証拠性; Johanson 2003: 279, 2018: 516)。ただし、*V-(i)sh kerak* は束縛的モダリティ (義務) 「~しなければならな

い)、*V-(i)sh mumkin* は束縛的モダリティ (許可) と動的モダリティ「~できる」も表しうる。ただし、2節以降に挙げる例文は、認識的モダリティを表す例に限られる。

- (1) *Ertarab vaqtli uch-ib ket-gan-i uchun u-lar* 分析的表現の構成
 morning early fly-CVB.SEQ leave-PTCP.PAST-3.POSS because 3SG-PL 要素と、分析的表現
allaqachon yet-ib bor-gan bo'l-ish-i kerak. によって表される意
 already reach-CVB.SEQ go-PTCP.PAST become-VN-3.POSS necessary 味と用例を示す。1. *V-*
 「(朝早く出発したから) 彼らはもう着いているはずだ。/もう着いたに違 (i)sh kerak は、動名詞
 いない。」(日高 2013: 480) *V-(i)sh* 「~すること」

と *kerak* 「必要である」から成る表現である。この表現は、確信「~はずだ、~に違いない」(1) を表すほかに、束縛的モダリティである義務「~しなければならない」(Kononov 1960: 399) も表しうる。

V-(i)sh kerak では、否定要素を前置させる場合と後置させる場合、それぞれ拘束的モダリティを表すが、意味が異なる。否定動名詞 *V-maslik* が *kerak* に前置される場合 (2)、「~しないべきだ=~するべきではない」という意味を表す。他方、否定コピュラ小詞 *emas* が *kerak* に後置される場合 (3)、「~する必要はない」という意味を表す。どちらの場合も束縛的モダリティを表すため、本発表ではこれ以降、否定要素が *kerak* に前置あるいは後置される場合は取り扱わない。

- (2) *Bu-ni unut-maslik kerak.* (3) *yoz-ish-im kerak emas*
 this-ACC forget-VN.NEG necessary write-VN-1SG.POSS necessary NEG
 「これを忘れるべきではない。」 「私は書く必要はない」(Bodrogligeti 2003: 859)
 (uzbekistonovozi.uz)

- (4) *U odam bugun kel-ma-sa-o kerak.* 2. *V-sa kerak* は、条件形 *V-sa* 「~なら、~たら」と *kerak* 「必要である」から成る表現である。
 3SG person today come-NEG-COND-3 necessary 先行研究によれば、予期された動作
 「(あの人は) 今日はずぶん来ないだろう。」 (日高 2013: 480) (Bodrogligeti 2003: 876)、疑い・心配

(Abdurahmonov et al. 1976: 110)、推定 (Kononov 1960: 398) を表す、と記述されている。否定は、動詞語幹に *-ma* を付すことで表される。(4) では *kel-ma-*「来ない」という否定形が用いられている。*V-sa kerak* の後ろにコピュラ動詞から成る否定要素 *emas* が置かれることはない (日高 2023: 87)。

- (5) *U-nda ochlik-dan o'l-ish mumkin.* 3. *V-(i)sh mumkin* は、動名詞 *V-(i)sh* 「~すること」と *mumkin* 「可能である」から成る表現である。
 3SG-LOC starving-ABL death-VN possible 先行研究によれば、可能性 (Bodrogligeti 2003: 853, Kononov 1960: 401)、許可 (Kononov 1960: 401) を表すと記述されている。(5) に可能性「~かもしれない」を表す例を挙げる。上記の先行研究中に可能「できる」を表すという記述はないが、可能として解釈できる例が Kononov (1960: 401) にある。

(6) *V-maslik mumkin* *V-(i)sh mumkin* は、2 パターンの否定を持ち、それぞれ異なる意味が表される: a. 否定動名詞 *V-maslik* 「V しないこと」に *mumkin* を続けることで、動作を実行しない可能性が表される (6)、b. *V-(i)sh mumkin* の後に *emas* 「~ではない」を用いることで、不許可・不可能が表される (7)。したがって、本稿では b. のパターン (7) は対象外とする。

- (6) *V-maslik mumkin* *V-(i)sh mumkin* は、2 パターンの否定を持ち、それぞれ異なる意味が表される: a. 否定動名詞 *V-maslik* 「V しないこと」に *mumkin* を続けることで、動作を実行しない可能性が表される (6)、b. *V-(i)sh mumkin* の後に *emas* 「~ではない」を用いることで、不許可・不可能が表される (7)。したがって、本稿では b. のパターン (7) は対象外とする。

- (7) *Lekin bu kecha bor-ish mumkin emas, chunki...*
 but this night go-VN possible NEG because
 「しかし、今夜...行けない、なぜなら...」 (Kononov 1960: 402)

Johanson (2003: 279, 2018: 516) では、証拠性を表す要素としてウズベク語の *ekan* が挙げられている。*ekan* はコピュラ動詞 *e-* の過去形動詞形が起源である (*ekan* < *e-kan* [COP-PTCP.PAST]; Bodrogligeti 2003: 777)。先行研究 (Kononov 1960: 272-273, Bodrogligeti 2003: 777-787) によれば、*ekan* は非動詞述部 (8) と動詞述部 (9)~(11) とともに共起可能である (太字で例中の述部を示す)。どちらの場合でも、*ekan* は、話者の発言が ①論理的な推論 ('it seems that, obviously'), ②間接的な情報に基づいてなされる話者の主観的な評価 ('as they say, as I hear'), いずれかに基づいているということを表すという (Bodrogligeti 2003: 777)。*ekan* が動詞述部と共起する例では、形動詞過去 *V-gan* (9) あるいは形動詞未来 *V-(a)r* (否定 *V-mas*; (10)) と共起するが、現在進行 *V-moqda* (11) と共起する場合もあるという (Kononov 1960: 273)。

- (8) *Navbatchi* ***rosa olijanob odam*** *ekan.* (9) *E'tibor* ***qil-ma-gan*** *ekan=man.*
 guard very great person EVID attention do-NEG-PTCP.PAST EVID=1SG
 「守衛はとても素敵な人のようだ。」 「私は注意を払わなかったようだ。」
 (Bidrogligeti 2003: 778) (Bodrogligeti 2003: 782)

- (10) *Sen hech bizniki-ga* ***kel-mas*** *ekan=san.*
 2SG never our.place-DAT come-PTCP.FUT EVID=2SG
 「君は全くわたしたちのところに来ないようだ。」 (Bodrogligeti 2003: 782)

- (11) ... *qoy-lar-i-ni* *Toshkent bozor-i-ga* ***keltir-moqda*** *ekan=lar.*
 sheep-PL-3.POSS-ACC Tashkent bazaar-3.POSS-DAT take-PROG EVID=3PL
 「彼らは...羊たちをタシケントバザールに連れてきているようだ。」 (Kononov 1960: 273)

以上に挙げた4つの表現では、1つの動詞語幹に複数の表現が後接しうる。理論上は、*kerak* と *mumkin* のあとには *ekan* がそのまま後続可能であり (例えば *V-(i)sh kerak ekan*)、そのほかの表現はコピュラ動詞 *bo'l-* 「である」を後続させることで後続可能となる (例えば *V-(i)sh kerak bo'lish mumkin*)。ただし、従来の記述では互いの承接順については特に注目していない。ウズベク語では、対事的モダリティを表す屈折接辞 (*-(i)b* [EVID] など) の後に、主観性の高い対人的モダリティを表す文末接語 (*=da* [強調]、*=a/=ya* [確認]、*=mi* [疑問] など) が現れうる (対事的・対人的というモダリティの区別は庵 2001: 168-181 を参照されたい)。このことから、主観性が高い要素であるほど文末に近い位置に出現すると想定される。命題的モダリティを表す分析的表現間でもこの想定は当てはまるのだろうか。本発表では、この問題を、コーパス調査と母語話者からの聞き取り調査を通して、命題的モダリティを表す分析的表現の相互承接を主観性に注目して明らかにする。まずは、2節で、コーパスから得られた用例を後接形式に着目して分析することで、それぞれの表現が持つ主観性の度合いを明らかにする。その後、3節で、インフォーマント調査を行うことで4形式それぞれの承接順を明らかにする。

2. コーパス調査

本調査では、各表現の主観性の度合いを明らかにする。本発表の調査には、Sketch Engine (<https://www.sketchengine.eu/>) に所収されているウェブコーパス *Turkic web - Uzbek* を用いた。このコーパスは2012年1月に .uz ドメインのウェブページからデータを集積したものであり、のべ語数は約1800万語である。用例検索の手順を *V-(i)sh kerak* 「~はずだ、~に違いない」を例に挙げて示す: 1. Concordance にて、*kerak** で検索する、2. 検索範囲を *kerak* の前3語に設定し、**sh** で絞り込み検索する、3. 対象外の用例を確認後、同様の例を検索し、除外する。

本調査では、後接形式のうち、コピュラ動詞 *e-*, *bo'l-* に基づく形式に注目して分析を行う。本発表では、主観性の度合いを、当該の表現が「話者の発話時の心理」(金田一 2004 [1953]: 338) のみを表すかどうかによって判断する。したがって、コピュラ動詞を後続させて、過去を表す、あるいは連体形述語と

して機能する＝発話時以外も表す表現は、当該要素の主観性が低いと判断する。なお、前接形式は取り扱わない。

2.1. コピュラ動詞 *e-*, *bo'l-*に基づく形式の後接

本節における分析の前提を述べる。形容詞である *kerak* と *mumkin* は、コピュラ動詞 *e-*, *bo'l-* に基づいた形式を後接することで、テンス・否定・証拠性を表す形式・接続形式を形成する。例えば、*kerak* に、*e-* 由来の小詞 *edi* [過去] (<*e-di* [COP-PAST]), *emas* [否定] (<*e-mas* [COP-PTCP.FUT.NEG]), *ekan* [証拠性] (証拠性の詳細は (8) とその直前の記述を参照されたい) あるいは *bo'l-* の条件形をそれぞれ後接させると、*kerak edi* 「必要だった」、*kerak emas* 「必要ではない」*kerak ekan* 「必要であるようだ」、*kerak bo'lsa* 「必要であるなら」となる。

本発表の調査では、下の表に示したように、*V-sa kerak* 「するだろう」と *ekan* 「するそうだ、するようだ」の場合、コピュラ動詞に基づく形式が後接する例は 0 例であった。一方、*V-(i)sh kerak* 「するはずだ、するに違いない」と *V-(i)sh mumkin* の場合、コピュラ動詞に基づく形式が後接する例が抽出された (以上、日高 2023: 87-88 には *V-sa kerak* と *V-(i)sh mumkin* については同様の言及がある)。

表 1: コピュラ動詞に基づく形式の後接した例

形式	<i>e-</i>	<i>bo'l-</i>
1. <i>V-(i)sh kerak</i>	380	254
2. <i>V-sa kerak</i>	0	0
<i>V-ma-sa kerak</i>	0	0
3. <i>V-(i)sh mumkin</i>	109	900
<i>V-maslik mumkin</i>	104	6
4. <i>ekan</i>	0	0

まず、*V-(i)sh kerak* 「するはずだ、するに違いない」の例を示す。*V-(i)sh kerak* は、コピュラ動詞の後置により、過去時制が表されたり、連体節述語として機能したりする。(12) では、*edi* によって過去時制が示されており、(13) では、*bo'l-gan* [be-PTCP.PAST] によって連体節述語として機能している。

(12) *Sabina-ning efir-i-ga soat 20-lar-da Feruza Jumaniyozova ham kel-ish-i*
 PN-GEN air-3.POSS-DAT hour -PL-LOC PN also come-VN-3.POSS

kerak edi.
 necessary PAST

「サビーナの放送に、20 時ごろフェルーザ・ジュマニヨゾワも来るはずだった。」 (yulduzlar.uz)

(13) *Sodir bo'l-ish-i kerak bo'l-gan voqea sodir bo'l-di.*
 appearance be-VN-3.POSS necessary be-PTCP.PAST event appearance be-PAST
 「起こるはずであったことが起きた。」 (namaste.uz)

次に、*V-(i)sh mumkin* 「するかもしれない」の例を示す。*V-(i)sh mumkin* にも、コピュラ動詞が後置される。*V-(i)sh kerak* と同様に、*edi* で過去時制が表され (14)、*bo'l-gan* [be-PTCP.PAST] によって連体節述語として機能する (15)。

(14) ... *sog'liq-ni saqla-sh, transport va xizmat ko'rsati-sh soha-lar-i-da*
 health-ACC keep-VN transport and service show-VN field-PL-3.POSS-LOC

ham qiyinchilik-lar-ni yuza-ga keltir-ish-i mumkin edi-o.
 also difficulties-PL-ACC surface-DAT bring-VN-3.POSS possible PAST-3

「…(前略) ヘルスケア、輸送、サービスの分野で問題を生じさせる (lit. 問題を表面に持ってくる) かもしれなかった。」 (ayol.uz)

(15) *Davlat, jamiyat va shaxs-ga jiddiy ekologik, ijtimoiy va boshqa*
 state society and person-DAT serious ecologic social and other

zarar yetkaz-ish-i mumkin bo'l-gan ekologik xavf-lar-ni...
 harm bring-VN-3.POSS possible be-PTCP.PAST ecologic danger-PL-ACC

「国家、社会、および個人に、深刻な環境的、社会的およびその他の害を及ぼすかもしれない環境リスクを…」(meteo.uz)」

2.2. 主観性による考察

Palmer (1986: 16) は、モダリティは話者の主観的な態度と意見を文法化させたものであると定義できると述べている。したがって、主観性は、モダリティにおいて形式の選択に関わる概念であると言える。日本語において、金田一 (2004 [1953]) が、日本語の助動詞「う」「よう」「まい」「だろう」は、感動助詞「よ」「わ」「さ」と同じように、終止形のみを持つこと、かつ文末にのみ位置することを根拠に、話者の発話時の心理を主観的に表現する、と述べている (金田一 2004 [1953]: 338)。以上より、発表者は、命題的モダリティにおける形式の選択に主観性が関わっており、モダリティを表す形式の形態統語的な特徴が「話者の発話時の心理を表す」という主観性に関わっていると考える。

先に2節で述べたように、本発表では、主観性の度合いを、当該の表現が「話者の発話時の心理」のみを表すかどうかによって判断する。したがって、コピュラ動詞を後続させて発話時以外の心理も表す表現は、当該要素の主観性が低いと判断する。2.1節の冒頭で述べたように、*V-sa kerak* 「するだろう」と *ekan* 「するそうだ、するようだ」では、コピュラ動詞に基づく形式が後接する例が抽出されなかった。つまり、これら両者は「話者の発話時の心理」のみ表す表現であるため、主観性が高いと言える。一方、*V-(i)sh kerak* 「するはずだ、するに違いない」と *V-(i)sh mumkin* では、コピュラ動詞に基づく形式が後接する例 ((12)~(15)) が抽出された、つまり、これら両者は「話者の発話時の心理」以外にも表す表現であるため、主観性が低いと言える。

3. インフォーマント調査

本調査では、各表現同士の承接順を明らかにする。手順は次の通りである。まず、*Ertaga yomg'ir yog'-[tomorrow rain rain]* 「明日雨が降る」などの無意志的な命題に4表現のいずれか1つを続け (ここまですべて「基本形式」とする)、さらにそれ以外の3表現のうち1つ (これを「後接形式」とする) が続く文を発表者が作例する。そして、インフォーマント2名 (A:女性・1994年生、B:男性・1989年生、両者ともタシケント市出身) にそれらが許容できるかどうかを尋ねた。表2に以上の調査の結果をまとめる。

表 2: インフォーマント調査の結果

基本形式	後接形式	A	B
1. <i>Ertaga yomg'ir yog'-ish-i kerak</i> rain-VN-3.POSS necessary 「明日雨が降るに違いない」	2. <i>bo'lsa kerak</i> 「だろう」	×	×
	3. <i>bo'lish mumkin</i> 「かもしれない」	×	×
	4. <i>ekan</i> 「ようだ」	○	※
	1. <i>bo'lish kerak</i> 「だろう」	×	×
2. <i>Ertaga yomg'ir yog'-sa-ø kerak</i> rain-COND-3.POSS necessary 「明日雨が降るだろう」	3. <i>bo'lish mumkin</i> 「かもしれない」	×	×
	4. <i>ekan</i> 「ようだ」	×	×
	1. <i>bo'lish kerak</i> 「に違いない」	×	×
	2. <i>bo'lsa kerak</i> 「だろう」	○	×
3. <i>Ertaga yomg'ir yog'-ish-i mumkin</i> rain-VN-3.POSS possible 「明日雨が降るかもしれない」	4. <i>ekan</i> 「ようだ」	○	○
	1. <i>bo'lish kerak</i> 「に違いない」	×	×
	2. <i>bo'lsa kerak</i> 「だろう」	×	×
	3. <i>bo'lish mumkin</i> 「かもしれない」	×	×
4. <i>Ertaga yomg'ir yog'-ar ekan</i> rain-PTCP.FUT EVID 「明日雨が降るようだ」			

※ *-(i)sh kerak* が束縛的モダリティ「～しなければならない」を表すなら許容される。

表 2 から明らかになった、許容されない承接順は以下の通りである。

1. *V-(i)sh kerak* 「するはずだ、するに違いない」に 3. *V-(i)sh mumkin* 「するかもしれない」が後続
2. *V-sa kerak* 「するだろう」に他の 3 表現が後続
3. *V-(i)sh mumkin* 「するかもしれない」に 1. *V-(i)sh kerak* 「するはずだ、するに違いない」が後続
4. *ekan* 「ようだ、そうだ」に他の 3 表現が後続

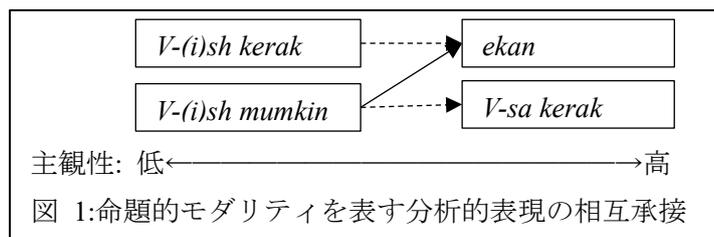
上記の結果から、*V-(i)sh kerak* 「するはずだ、するに違いない」と 3. *V-(i)sh mumkin* 「するかもしれない」は互いに組み合わさることがないこと、*V-sa kerak* 「するだろう」と *ekan* 「ようだ、そうだ」には何も後続しないことから両者は常に文末寄りに位置することが、それぞれ明らかになった。

後接可能なものについて述べると、1. *V-(i)sh kerak* には 4. *ekan* が、3. *V-(i)sh mumkin* には 2. *V-sa kerak* あるいは 4. *ekan* が、それぞれ後接可能である (ただし、2 人の母語話者のうち、少なくとも 1 人は許容しているが 2 人の判断は一致していない)。

4. 結論と今後の課題

結論を述べる前に、もう一度 2.2 節の主観性による考察と、3 節のインフォーマント調査の結果を述べる。2.2 節では、主観性の度合いを、当該の表現が「話者の発話時の心理」のみを表すかどうかによって判断する。したがって、コピュラ動詞を後続させることで発話時以外も表す表現は、当該要素の主観性が低いとみなす。表 1 に示したコーパス調査の結果をこの基準に照らすと、*V-sa kerak* 「するだろう」と *ekan* 「するようだ、するようだ」では、コピュラ動詞に基づく形式が後接する例が抽出されなかったため、主観性が高い。一方、*V-(i)sh kerak* 「するはずだ、するに違いない」と *V-(i)sh mumkin* 「するかもしれない」では、コピュラ動詞に基づく形式が後接する例が抽出されたため、主観性が低い。3 節では、インフォーマント調査の結果 (表 2) から、*V-(i)sh kerak* 「するはずだ、するに違いない」と 3. *V-(i)sh mumkin* 「するかもしれない」はお互いに組み合わさることはないことが明らかになり、*V-sa kerak* 「するだろう」と *ekan* 「ようだ、そうだ」はどちらも常に文末に位置することが明らかになった。さらに、1. *V-(i)sh kerak* には 4. *ekan* が、3. *V-(i)sh mumkin* には 2. *V-sa kerak* あるいは 4. *ekan* が、それぞれ後接可能であることが明らかとなった。

以上の考察と結果を図 1 にまとめる。主観性の高低に関しては 2.2 節の考察をもとに、各形式の組み



合わせおよび承接順については 3 節の結果をもとに、4 形式を配置している。同じ列に並んでいる形式は互いに共起しないことを、破線は 2 人の母語話者の判断が一致しないが少なくとも一人は許容していることを、それぞれ表す。図 1 では、主観性が低い表現がより動詞語幹の近くに位置している。したがって、本発表では、ウズベク語の命題モダリティを表す 4 つの分析的表現においても、主観性が高い要素であるほど文末に近い位置に出現する、と結論づける。

さらに、*V-(i)sh kerak* と *V-(i)sh mumkin* が認識的モダリティの下位範疇「蓋然性」としてまとめられることを提案する。*V-(i)sh kerak* 「するはずだ、するに違いない」、*V-sa kerak* 「するだろう」、*V-(i)sh mumkin* 「～かもしれない」の 3 形式は、意味的には認識的モダリティを表す要素として認められる。しかし、本発表では、*V-(i)sh kerak* 「するはずだ、するに違いない」、*V-(i)sh mumkin* 「～かもしれない」の 2 形式は、コピュラ動詞の後接があり発話時以外の時間も参照できることから主観性の度合いが低いこと (2.2

節)、お互いに組み合わさることがないこと (3 節) を指摘した。これらのことから、本発表では、この 2 つを認識的モダリティの中で「蓋然性」を表す形式としてカテゴライズし、話者が比較的高い確率で起こると判断した事態には *V-(i)sh kerak* が用いられ、話者が比較的低い確率で起こると判断した事態には *V-(i)sh mumkin* が用いられる、と記述する。これは、*V-(i)sh kerak* は「確信」という高い蓋然性を表すとされることと ((1) を参照されたい; 日高 2013: 480)、*V-(i)sh mumkin* は高い蓋然性を表す副詞 *shubhasiz* 「間違いなく」とは共起できないが低い蓋然性を表す副詞 *balki* 「おそらく」とは共起できることが指摘されている (日高 2023: 93) ことから裏付けされる。なお、*V-sa kerak* 「するだろう」は、コンピュータ動詞の後接がなく発話時しか参照できないため主観性が高く、高い蓋然性を表す副詞 *shubhasiz* 「間違いなく」とも低い蓋然性を表す副詞 *balki* 「おそらく」とも共起できること (日高 2023: 93) から、*V-(i)sh kerak* 「するはずだ、するに違いない」と *V-(i)sh mumkin* 「~かもしれない」とは異なるカテゴリーに分類する。

今後の課題を述べる。図 1 では、*V-sa kerak* 「するだろう」と *ekan* 「するそうだ、するようだ」も同列に配置されているが、意味的には異なるカテゴリー (前者が認識的モダリティ、後者が証拠性) を表す。2 節で述べたように、この 2 つはコンピュータ動詞が後接しないという文法的な特性を共有しているため、同じカテゴリーに入る可能性があるが、他に文法的な観点から違いがないか検討を重ねる必要がある。

謝辞

本発表の調査にご協力いただいたインフォーマントの方々に深く感謝申し上げます。ただし、本発表における誤りがあった場合、その誤りは全て筆者に帰するものである。なお、本研究は JSPS 科研費 JP22J01538、JP22KJ1443 の助成を受けている。

略号一覧 (Leipzig Glossing Rules に記載されているもの以外)

EVID (evidential) 証拠性/ PN (personal name) 人名/ SEQ (sequential) 継起/ VN (verbal noun) 動名詞

参考文献

- Abdurahmonov, G'. A. va Sh. Sh. Shoabdurahmonov, A. P. Hojiyev (1976) *O'zbek tili grammatikasi II-tom Sintaksis*. [ウズベク語文法 第 2 巻 統語論] Toshkent: O'zbekiston SSR "Fan" nashriyoti.
- Bodrogligeti, András J. E. (2003) *An academic grammar of Modern Literary Uzbek*. München: Lincom Europa.
- 日高晋介 (2013) 「ウズベク語: 補遺データ (受動表現, ヴォイスとその周辺, モダリティ)(データ)」『語学研究所論集』18: 467–85.
- 日高晋介 (2023) 「ウズベク語における推定・可能性を表す分析的表現の差異: *V-sa kerak* と *V-(i)sh mumkin* に注目して」『北東アジア諸言語の記述と対照』3: 79–98.
- 庵功雄(2001)『新しい日本語学入門 ことばのしくみを考える 第 2 版』東京: スリーエーネットワーク.
- Johanson, Lars. (2000) *Turkic Indirectives*. Lars Johanson and Bo Utas. (eds.) *Evidentials: Turkic, Iranian and Neighbouring Languages*. 61–88. Berlin; New York: De Gruyter Mouton.
- Johanson, Lars. (2003) *Evidentiality in Turkic*. Alexandra Y. Aikhenvald and R.M.W. Dixon. (eds.) *Studies in Evidentiality*. 273–90. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Johanson, Lars. (2018) *Turkic Indirectivity*. Alexandra Y. Aikhenvald. (ed.) *The Oxford Handbook of Evidentiality*. 509–24. Oxford: Oxford University Press.
- Palmer, F. R. (1986) *Mood and Modality*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Palmer, F. R. (2001) *Mood and Modality. Second edition*. Cambridge: Cambridge University Press.